若木

経堂聖書会 七人会 編
第 74 号
2023 年 10 月 10 日

石は叫ぶ

月　本　昭　男

今夏は猛暑が世界中を襲いました.「記録的」といわれ，異常気象を指摘する専門家の声も聞かれます．戦いを止めず，エネルギーを大量に消費する人類に対して自然が怒っているかのような感覚にとらわれた方もいらしたのではないでしょうか．そのようななか，戦争を考える 8 月 15 日前後，私はキリスト者遺族の会編『石は叫ぶ ── 靖国反対からはじまった平和運動 50 年』（刀水書房）を学ばせてもらいました.

キリスト者遺族の会は，ご存じの方も少なくないと思いますが，1969 年，日本遺族会が母体となって靖国神社の国家護持を求めた法案の国会上程に，「信教の自由」を掲げて反対するキリスト者遺族によって設立されました．そして，2021 年 12 月，半世紀にわたる活動の歴史に幕を下ろしました.

このたび上梓された『石は叫ぶ』には，キリスト者遺族の会の歴史，機会あるごとに公けにされた「宣言」「声明」，会が発行した機関紙と「石は叫ぶ」（ハバ 2：11，ルカ 19：40）という表現を用いた文集から選んだ文章

などが収められています．編集責任は吉馴明子さんと木村庸五さん，執筆者には無教会の立場に立つキリスト者の方々も名を連ねています．

当初からこの会に関わられ，ながらく恵泉女学園大学で教鞭をとられた吉馴さんは，本書のはじめに，50年にわたる会の運動を振り返っておられます．この会の第二代実行委員長・西川重則氏と同じ教会員として親しくされた弁護士の木村さんは，学生時代，キリスト教の学生寮でともに過ごした私の親しい先輩です．『石は叫ぶ』は，刊行日8月15日を待たずして，木村さんから届けられたのです．

キリスト者遺族の会について私は，「靖国違憲訴訟」などとの関連で名前を聞くに留まっていましたが，本書によって，靖国神社の霊璽簿から遺族の名を抹消することを要求することからはじまったこの会の半世紀に及ぶ歴史を知りました．

会員と会友の方々は，牧師として，軍医として戦争を体験され，兄弟を亡くされた初代実行委員長小川武満氏のもと，さらに，聖書と憲法とを基本にされた第二代実行委員長西川重則氏のもと，定期的な集会や研修会などをとおして，戦争の実態を学び，遺族の会の活動を平和運動へと高めてゆきました．天皇制のもとで戦没者（軍人・軍属以外の戦争犠牲者は含まれません）を「英霊」として祀り上げ，戦争を美化する靖国神社の欺瞞性をあばくだけでなく，戦没者が被害者であったと同時に加害者でもあったことを深く認識し，戦争責任のありかを探求し，アジア諸国との和解の必要性，さらには世界の戦争犠牲者への連帯へと眼を向けていったのです．

戦後78年が経過し，もはやキリスト者遺族もごくわずかです．しかし，人類は戦いをやめません．戦後，「国際平和」を掲げた日本においても，安全保障が声高に語られ，当然のごとく，国防予算が増強されています．本書を編まれたお二人は，キリスト者遺族の会の記録を残すことによって，かたちは異なっても，戦争の実態をふまえた平和運動が若い世代に引き継がれていってほしい，との願いを本書に込められました．

キリスト者として「平和の君」を仰ぐとはいかなることなのか．そのことを考えさせてくれる読書体験でした．

（2023年8月25日記す）